

# 『江戸川乱歩傑作選』

## 初めに……

まず初めに、レジュメの送信が遅れて申し訳ありません。今後例会を行う皆様は、私を反面教師にして、前日まではレジュメをMLで回してくださいな。

最近、「古典離れてあるんだな」と思う機会がありました。そういう私も、古典作品は全く読んでいないのですが……。そこで折角のミス研なので、たまには戦前の探偵小説で例会をしても面白いんじゃないかなと思ひ、この本を課題本に設定しました。意外と乱歩既読者が多かったため新鮮味には欠けるかもしれませんが、どうかお付き合いください。

なお、レジュメ内に出てくるページ数は、新潮社出版の『江戸川乱歩傑作選』（平成元年10月15日 48刷 改版）の物です。

## ① 作者紹介

明治27年（1894年）生れ。本名平井太郎。筆名は、いうまでもなく「エドガー＝アラン＝ポー」のもじり。三重県の生れだが、3歳の時名古屋に引っ越す。小学校の頃に菊池幽芳の『秘中の秘』を母親に読んでもらい、探偵小説に興味を示し、中学生の頃押川春浪の武俠冒険と黒岩涙香の怪奇恐怖に心を奪われた。早大政経学部卒（大正5年）。在学中にポーやドイルを耽読。探偵小説の習作や翻訳を試みる。大学卒業後、谷崎潤一郎とドストエフスキーに感動、佐藤春夫、宇野浩二にも心酔した。作家として活動する前に、12の職業を経験している（奥さんとは、この頃結婚）失業時代の1922年8月頃に「二銭銅貨」、「一枚の切符」を執筆し、探偵小説通の馬場孤蝶に送ったが、返事が貰えぬまま原稿を返送してもらって新青年編集長森下雨村に送り、それが認められ、大正12年4月の「新青年」に「二銭銅貨」が、7月号に「一枚の切符」が載せられた。その後「D坂の殺人事件」、「心理試験」、「赤い部屋」、「屋根裏の散歩者」が大正14年の「新青年」に、「人間椅子」が「苦楽」に載せられた。この頃職業作家として立つ決心をし、大阪毎日広告部を一年程で辞職した。その後数々の作品を発表したが、昭和2年3月に自己嫌悪に陥り、休筆し、放浪の旅に出た。14カ月の休筆の後、再び執筆。多くの作品を創作した。その後、戦争が始まり、「芋虫」を始めとした、乱歩作品の多くが反軍国主義と見られるなどあった。戦後、日本推理小説復興へ献身する事となるが、今回は省略させて頂く。昭和40年7月28日死去。日本推理小説の開拓者、達成者、指導者、育成者としての功を果たし、もっとも推理小説を愛した作家、評論家であった。

（『日本近代文学大事典（一卷）』（昭和五十二年十一月十八日 日本近代文学館・小田切進編 講談社）より抜粋、要約）

## ② 作品紹介……の前に

近年、“本格”探偵小説、“本格”推理小説と言った物の他にも、実に様々な小説が「ミステリー小説」として扱われている。一方で、本格・変格物の違いや探偵小説・推理小説の定義、さらには「ノックスの探偵小説10戒」、「ヴァン・ダインの探偵小説20戒」等、昔からの厳密な規則が幾つも存在している。

ここで一つ、疑問が生じる。「昔からある厳密な規則は、いつ頃からこんなに自由になったのだろうか」という物である。勿論、今でも厳密な規則を好む作者や読者もいるし、過去の作品の中にも一風変わった作品はある。それになにより、新たな分野を開拓しようという小説家達の努力が、ミステリーの幅を広げたと言えるでしょう。しかし、探偵小説というジャンルが生まれてから、様々な種類のミステリー小説が流行するのに至るまでの間には、多くの人の努力があったのだらうと考えられる。そこで今回、乱歩に関わりの深い「新青年」の活動や乱歩自身の発言を見る事で、この疑問に触れてみようと思う。

### ① 純文学作家と探偵小説——「新青年」時代——（『探偵小説百科』 昭和50年 九鬼紫郎 金園社）より

探偵作家の母胎であった「新青年」は、創刊当時海外発展を鼓吹する青年雑誌で、翻訳の探偵小説は読者の肩の力をときほごす「読物」として採用された。しかしこれが意外に公表をうけ、急速に翻訳探偵作品を多くし、ついには翻訳満載の増刊号発行を、恒例とするようになった。（中略）

乱歩が狂喜してこの増刊号を、数日間というもの手許から離さず、出世作『二銭銅貨』の執筆にとりかかった、というエピソードは有名だが、さて江戸川乱歩という先駆者が出現すると、これに力を得た『新青年』編集者森下雨村は、探偵小説の発展と新作家の続出をねらって、純文学の作家こまず、探偵小説の執筆を精力的に依頼してまわった。純文壇にも多くの探偵小説理解者がいて、谷崎潤一郎や芥川龍之介、佐藤春夫のように探偵小説、あるいは怪奇、幻想、異常心理の文学を発表し、純文壇に異彩を添えていたがこの事実を、ジャーナリストの雨村が知らぬはずはなく、彼は純文学作家を刺激剤にと考えたのであり、この方針は編集部に、伝統的にうけつがれた。(中略)

純文学作家起用の結果は、はたして成功であったろうか、あるいは無意味であったか、という問題が最後に呈示される。この解答は読者によってことなるが、乱歩の意見をまず示せば、だいたい失敗したことになる。多数の好評作があったにせよ、いずれも本格探偵小説からはるかに離れたものであり、『新青年』の誌風が探偵趣味が遠ざかり、風俗小説やユーモア小説その他を、多く掲載するようになると、純文学の作家もしたがって、探偵小説と無縁の作品を各ことになったから、純文学者の起用はその雑誌面を賑わせたにとどまると見てよいのである。だが乱歩は、「日本では純文学作家に探偵小説の執筆を勧めても、結局無駄だという声もあるが、そういうふうに諦めてしまうのは、雑誌編集者の道ではない(二四年七月『宝石』増刊号)」といい、作家のすくない探偵小説界であるから、努力を外部におよぼして異色作品を、一篇でも多くとるべきであると主張した。

## ②江戸川乱歩「日本の誇り得る探偵小説」(『新青年』 大正14年6巻10号夏季増刊号 森下岩太郎編 博文館)より

我々探偵小説好きの間に、妙な偏見がある。専門の探偵作家の書いたものでなければ、例へば文壇の人の作物などは、純文藝であつて、探偵小説は低級だと、こちらから極めて了らぬ様のもので、甚だ感心しない。(我が森下氏でさへ、どつかでそんな口吻を洩らしてゐられたことがある) もつと廣く考へてはいけないものだらうか。ポオは勿論、ホフマン、バルザック、ドイツケンスなども探偵物の先祖として上げられる位だ。潤一郎や春夫の作品を探偵小説といつてはいけないものだらうか。といふ意味は、探偵小説イコール通俗小説ではなくて、その中には高級な、純文藝と差別のない作品も、あり得るのではないかといふことだ。「途上」はその適例である。あれは藝術品であつて、同時に純探偵小説ではない。

この様に、乱歩がデビュー時にお世話になった「新青年」は、本格探偵小説性を犠牲にして、純文学作家の書く探偵小説を多く取り入れた。また、乱歩もこの考えに賛同し、純探偵小説性と純文学性は共存できるのだと主張した。勿論、「新青年」や乱歩の活動が純文学作家による探偵小説執筆の原因の全てではないし、ましてやミステリーの幅が広がったのには、純文学作家が探偵小説を書く事以外にも、様々な要因があったと考えられる。しかし、彼らの活動が現在のミステリー小説に多大に影響を与えているという事は、疑いようがない事実である。

## ③作品紹介

### 一、「二銭銅貨」

乱歩デビュー作。ここでは暗号については触れず(点字の件はともかく、八文字飛ばしで読むとか…分からんわ。「私」のドヤ顔に殺意を覚えたのは私だけではないのでは?)「私」の描写を追っていこうと思う。

- ・「私」が何のためらいもなく、全財産の半分である10円を与えるシーン。(P20)  
→普通全財産の半分を与えるか? P16にもある様に、この時期にお金が入る(見かけだけだが)とはいえ、その使い方は堅実である。
- ・「松村のその後の行動について~そして独りほくそ笑んでいるうちに」(P20)  
→「ほくそ笑む」のは普通に考えたらおかしくない? P23の「二人の多少知的な青年が~」で分かる通り、松村も私も負けず嫌いであるはずなのに、「私」は随分余裕である。同様に「私は、それを、心安だてに、蒲団の中から~」(P23)も余裕過ぎる気がする。
- ・おもちゃの紙幣の件(P30)  
→「ああ、そうだ。君がいつか話したんだ。」(P31)。気付く松村よ! 考えてみれば、二銭銅貨の出所、タバコ屋の嫁の情報も「私」からだった。まあ気付かんか。

これらの事から、読者は「私」が何か企んでいた事を察する事が出来る…かもしれない。  
まあ何か色々言ってきましたが、「現実というものがそれほどロマンチックだと信じているのかい」(P33)という「私」の返しからの真実の露呈や、最後の段落でのぼやかし方などが、私は好きです。

## 二、「二魔人」

夢遊病者の物語。どうでもいいけど、乱歩の作品に出てくる夢遊病者って、なんでこんなに自分が殺人を犯す事まで恐れるんだろうか。

- ・P41～P42の井原氏の「斉藤氏の表情に覚えがある」や「彼の眼は～何事かを語っているように見えた」(P48)は、最後のオチに繋がる伏線。
- ・斉藤の推理(告白?)が正しいとするならば、P43での井原氏の行動は本当に夢遊病によるものか、もしくは寝ぼけていたという事になるのか?
- ・会社員の男の時計を盗んだ後、噂が学校中に広がるが、これも木村の仕業。木村クズですね。(P45)
- ・老人を殺した際、何故ハンカチを持っていたのか考えなかったのか。普通寝る時にハンカチなんか持って寝ないだろうから、もし井原氏は本当に夢遊病だったとしたら、いちいちハンカチを持っていった事になる。

## 三、「D坂の殺人事件」

明智小五郎初登場作品にして密室殺人!現代とは家の構造が違うので少し分かりにくい気はする。

- ・「私」の理論である「指紋を消す為に第一発見者になる・縞々模様の着物を犯人が来ていて、格子の間から別々の色が見えた・明智にアリバイはない」に対する明智の推理「偶然タングステンが繋がったのだよ・人間の記憶なんて曖昧なのさ・犯人と被害者はSMプレイをしていたのさ」……。いや、明智さんの推理には論拠があったし、何より話のオチを犯人の自首にしているから、いいんだけどさ……。
- ・指紋で指紋を消す事で、警察の目はごまかせるのか?
- ・P91～P92の明智の考えは、明智の探偵としての心得?他の作品でも、この考え方は実践されている様に思う。

## 四、「心理試験」

ちょっと変わり種ですね。明智小五郎が犯人の性格を読み(それこそ、「心理的に人の心の奥底を見抜くこと」で)犯人にトラップを仕掛ける様は、実に鮮やかだと思うのですが、どうでしょう?

- ・「おそらく彼は先天的な悪人だったのかもしれない。」(P98)という一文から、谷崎潤一郎の「前科者」が思い浮かんだ。乱歩は谷崎潤一郎の文学も好んでいた為、影響を受けている可能性もあるのかも。
- ・「犯罪の方法は、～且つあからさまにすべきだと言うのが、彼の一種の哲学だった。」(P103)は、現実的だと思う。

## 五、「赤い部屋」

谷崎潤一郎の「途上」に感銘を受け書き上げた作品。乱歩は以下の様に「途上」を称賛している。これは「D坂の殺人事件」での明智と「私」の会話(P63)からも分かるだろう。

「日本の誇り得る探偵小説」(『新青年』大正一四年六卷一〇号夏季増刊号 森下岩太郎編 博文館)より

(前略)現在の文壇に、探偵的作物を発表した人は二三に止まらないが、佐藤春夫の「指紋」を外にしては、順一郎のそれに追従し得るものを知らぬ、新青年の読者で、彼の探偵物をまた読まぬ人があつたら、是非読んでほしい。中にも「途上」は、面白味では他のものに劣るかも知れないけれど、そこに取扱はれたデリケートな犯罪は、探偵小説に一つの時代を劃するものといつて、少しも過言ではない。僕は「途上」こそ、これが日本の探偵小説だといつて、外国人に誇り得るものではないかと思ふ。ポオ以降、探偵作家は雲と排出したけれど、その中の誰が「途上」の様な微妙な探偵小説を書き得たか(後略)

江戸川乱歩「日本推理小説大系第一巻『明治大正集』」(昭和三五年一二月 東都書房)より抜粋

さて谷崎潤一郎の四つの作品であるが、「途上」は私が探偵小説を書きはじめたころの随筆で、日本の誇るべき探偵小説として「途上」をあげ、その「プロバビリティの犯罪」の着想は、海外作品にも例がないといって創意を称えたものである。そして、後に私自身も同じトリックによる「赤い部屋」を書いたほどである。

これに対する谷崎の返答が以下の通りである。

谷崎潤一郎「<sup>はるさむ</sup>春寒（探偵小説のこと、渡邊温君のこと）」（『新青年 第五号（四月増大号）』 昭和五年四月 森下岩太郎 博文館）より

僕の旧作「途上」と云ふ短編が近頃江戸川乱歩君に依つて見出され、過分の<sup>かたじけな</sup>水晶を 恭うしてゐるのは、作者として有り難くもあるが、今更あんなものにと云ふ氣もして、少々キマリが悪くもある。ありていに云ふと、あれが発表された當時は、誰も褒めてくれた者はなかつた。（中略）「途上」はもちろん探偵小説臭くもあり、論理的遊戯分子もあるが、それはあの作品の假面であつて、自分で自分の不仕合せを知らずにゐる好人物の細君の運命一見てゐる者だけがイラ／＼するやうな、——それを夫と探偵の會話を通して間接に描き出すのが主眼であつた。

ツンデレです。ツンデレですよ皆さん！まあ、谷崎さんプライド高い天才型だったので、仕方ないっちゃ仕方ないのですが……。まあ、そんな背景をもつ「赤い部屋」です。

- ・プロバビリティの犯罪の一つに「尿に電氣を通して感電死させる」という物がありましたが、尿ってそんな電氣通すの？と思いました。調べてみると、尿は電解質になりえるそうで、「おむつに電極をセットしておいて、尿が流れたら電氣が流れ、電球に電氣が付く」という装置も考えられたとか何とか。
- ・これだけ一人の人間が「人の死に目」に遭遇していたら、いくら何でも警察が怪しむでしょ。観客達はそう考えなかったのだろうか。コオン君や金〇君並の死との遭遇率なんじゃないかな。
- ・「赤い部屋」の幻想的な雰囲気四散する最後のシーンが私は凄く好きなのですが、皆様はどうでしょうか？

## 六、「屋根裏の散歩者」

屋根裏を音もなく移動し、他人の行動を盗み見る事で退屈を紛らわす郷田君。果たして木造アパートで音もたず移動するなんて出来たのだろうか。まあそんな事はどうでも良いとして、「屋根裏」という非日常な空間での他人のプライベートの覗き見という非日常な行為……。覗きはともかく、「屋根裏」には心がくすぐられます。

- ・P177～P178 の屋根裏の描写が私は好きです。
- ・P180 の郷田の衣装説明に茶目っ氣を感じます。
- ・明智の証拠の集め方は、確かにセコイ気はする（P213）。証拠を偽造したり盗み見したんじゃ警察にも通報出来んわなあ。
- ・「目覚まし時計鳴ったから怪しい」というが、失恋による突発的自殺で、目覚まし時計の存在に気が回らなかった可能性だってあるじゃないか。いや、あくまで捜査の取っ掛かりに過ぎないし、今でも良く使われる手法だしいいんですけど、今回の場合は根拠が全体的に薄過ぎて、それ故上記の「ボタン偽造」が気になるんですね。

「人間椅子」、「鏡地獄」、「芋虫」についてのレジュメでの記述は、敢えて避けます。

## 終わりに……

今回は主に推理小説としての要素や、私の素朴な疑問（突っ込み）に焦点を当ててみましたが、乱歩の小説には推理要素の他にも、怪奇性、幻想性などの要素もあります。これら全てを総合して読んでみると、「乱歩の作品って面白い」と私は思うのです。現代作家の作品を読むのも楽しいですが、たまには古典の作品を読んで、その世界に浸るといっても悪くないのではないのでしょうか。